

第 35 回 日本動物児童文学賞審査委員会の会議概要

I 日 時 令和5年7月19日(水) 14:00 ~ 16:00

II 場 所 日本獣医師会会議室及びWEB 併用

III 出席者 (★はWEB 出席)

【委員】

動物福祉・愛護部会長

佐伯 潤 日本獣医師会理事 (動物福祉・愛護部会長)

動物福祉・愛護関係省庁及び教育関係省庁関係者

野村 環 環境省自然環境局総務課動物愛護管理室長

藤枝 秀樹★ 文部科学省初等中等教育局視学官

動物福祉・愛護関係学識経験者

浅利 昌男 公益社団法人日本動物福祉協会顧問

田畑 直樹 公益財団法人日本動物愛護協会理事長

成島 悦雄★ 井の頭自然文化園元園長

公益社団法人日本動物園水族館協会顧問

平山 淳 公益社団法人日本愛玩動物協会副会長

【日本獣医師会】

境 政人 公益社団法人日本獣医師会専務理事

IV 議 事

- 1 委員長の選任 (協議)
- 2 第二次審査に至るまでの審査経過等 (説明)
- 3 審査 (協議)
- 4 その他

V 会議概要

冒頭の挨拶として、境専務理事から、本年6月27日に開催された第80回通常総会で役員改選が行われて新たな任期での役員体制が開始された。今後の本会の課題として、①マイクロチップによる登録情報の管理のあり方について、現行の法定登録制度には課題が多く、その解決に向けた早期の法改正を目指して要請を続けていること、②自然災害が多く発生する状況に鑑み、日本獣医師会に常設の危機管理室を設置すること、③災害獣医療認定・専門獣医師 (VMAT) の認定・研修制度の確立に向けた準備を進めていること等本会の活動の近況が紹介された。次いで、各委員に対し、多忙の中第二次審査にご協力いただいた

ことへの感謝が述べられるとともに、本日の議事への協力が依頼された。

1 委員長の選任

委員の互選により、佐伯委員が委員長に選任された。

2 第二次審査に至るまでの審査経過等（説明）

事務局から、資料に基づき、応募状況、第一次審査、第二次審査の経過等について説明された。昨年度に引き続き、本年度も、一般社団法人日本児童文芸家協会と第一次審査の業務について委託契約を結び、同協会の常務理事である金治直美氏を委員長、わたなべまゆみ氏を副委員長とした有識者 18 名で第一次審査委員会を設置し、応募された 104 作品の中から 15 作品を第二次審査候補作品として選出した旨報告された。

3 審査（協議）

各審査委員による審査候補作品の事前審査結果をもとに、協議の結果、別紙のとおり大賞 1 作品、優秀賞 2 作品、奨励賞 5 作品が選定された。

4 その他

生成型 AI を使用した応募について、事務局から、資料に基づき説明され、他のコンクール等の応募規定における記載等も参照しつつ協議した結果、生成型 AI 等を用いて作成した作品による応募は、今後「不可」として募集要項等を一部改正して対応することとされた。

5 まとめ

- (1) 大賞、優秀賞受賞者の表彰は、令和 5 年 9 月 23 日（土）に東京国際フォーラムにて開催される令和 5 年度動物愛護週間中央行事屋内行事の会場において行う。
- (2) 大賞及び優秀賞の 3 作品は、「第 35 回日本動物児童文学賞受賞作品集」として製本のうえ、都道府県等の関係機関、小学校等の教育機関及び図書館等に配布する。

第 35 回日本動物児童文学賞入賞作品

【日本動物児童文学大賞】

「猫と戦争」

まきうちれいみ（東京都）

<受賞理由>

戦争体験者の祖母と戦争を知らないひ孫との世代間でのペットへの扱いの違いは、動物愛護に関心を持つきっかけになると同時に、被災時のペットとの避難のあり方についても考えさせられる作品である。また、戦時下に幼少期を過ごした主人公が、国のために自身の飼い猫を献納したつらい経験をリアルに描写しており、戦時中特有の相互監視の雰囲気や、貧しい生活の中で国のために生きる様子は、子どもたちに過去の歴史について知ってもらうきっかけともなり得る作品である。

戦争という重いテーマを扱っているが、祖母とひ孫との軽妙なやり取りによって、物語が重く悲しいだけでなく、バランスが保たれた読後感が良い作品となっている。

【日本動物児童文学優秀賞】

「ぼくがライフに出会うまで」

川瀬えいみ（東京都）

<受賞理由>

小学校入学と同時に引っ越し、友達がいまま三年生になった少年が、国語の時間に書いた家族についての作文がきっかけで家族で犬を飼うことを検討することになるが、両親は動物を飼う「覚悟」について少年に問いかける。両親のペットとの辛い経験が語られる場面では、適正飼養や終生飼養の課題について、自然と考えさせるような構成になっている。

また、子どもながらに親に気を遣って本音を打ち明けられない少年の様子や新生活の不安、反抗期など、子どもたちに深く共感を与え得る内容を織り交ぜつつ、生き物を飼うことの責任や命の大切さを説くと同時に、家族との絆を描くことで読者に共感と学びをもたらしている。

「シュガーにさよなら」

伊東 菫花（茨城県）

<受賞理由>

三年前、お母さんのうっかりで逃げてしまった飼い猫のシュガーに、主人公の愛実が校外学習の農業体験で訪れた農家で再会する物語。シュガーと再会した喜びの反面、他の家の猫として過ごすシュガーへの複雑な気持ちなど、愛実の心情が丁寧に描かれており、読者の共感力を育むことができる作品となっている。

都会にある愛実の家と田舎にある農家でのシュガーの様子を通して、人や地域によるペットの安全管理や飼育の意識の相違、予防接種などの飼い主の責務について考えさせる要素も含まれており、自らのペットに対する責任を深く考えるきっかけを得ることができる作品である。

【日本動物児童文学奨励賞】

「カメ様の思し召しーぼくのカメ飼育録ー」

タケルノミコトモドキ（東京都）

<受賞理由>

カメの飼育方法や生態について非常に詳細に描かれており、餌のあげ忘れや掃除を怠ってしまうなど、ペットの飼い主が共感できるようなエピソードを交えて飼育の難しさや奮闘がリアルに描かれている。また、終生飼養の重要性や飼い主の責任についても説かれており、読者へペットを飼うことについて考えさせるきっかけを与えるとともに、学校という身近な環境で起こり得る出来事を通して、友達、先生との関わりの中で子ども達が成長していく姿がよく描かれている。

人獣共通感染症にも言及し、読者に対して意識を喚起する役割も果たしている一方、所々でファンタジー要素を巧みに取り入れることによって、堅苦しさが緩和され、より魅力的な作品となっている。

「おかえり リキ！」

横田 善広（福島県）

<受賞理由>

東日本大震災で被災した家族が、ドッグトレーナーの被災犬保護活動により、被災地に取り残してしまった愛犬と再会を果たす物語。

町の様子や置き去りにされたペットの様子などがリアルに描かれており、被災地や被災ペットの深刻な状況を、臨場感をもって感じ取ることができるような作品である。

飼い犬のリキを置き去りにした後悔や、再会の喜びなど、多様な感情が描かれており、読者に深い感動をもたらし、作品に引き込む要因となっている。

また、被災ペットの保護活動に焦点を当てており、保護活動の難しさや苦勞が詳細に描かれている。ペットの育て方による保護活動への影響など、普段からの適正飼養の重要性についても教えられる内容であり、動物飼養に対する意識を深めるきっかけとなり得る作品である。

「クリスマスホーリー」

名倉 せてら（愛知県）

＜受賞理由＞

壮年男性のロバートは、唯一心を許せる存在である執事の入院をきっかけに、警察犬には向いていないがファシリティドックとして素晴らしい活躍をするニコと出会う。動物嫌いのロバートだったが、ニコの素晴らしい活躍や優しさに触れるうちに、次第に心を許していくようになる物語。ニコの愛らしさが作品に魅力を加え、読者の心を惹きつけている。

また、ニコがファシリティドックとして患者の生活をサポートする場面や、自身の能力を生かしている様子を描くことで、ファシリティドックの存在と必要性に対する理解や、人と動物との共生の在り方について考えを深めることができる作品となっている。

「たかがペット」って言わないで！」

こばやし きよ（群馬県）

＜受賞理由＞

愛猫のエルを失った小学五年生のありすは、クラスメイトのりつを通して保護猫トラと出会う。トラは、飼育するためのトライアル中に逸走してしまう。クラスメイトたちの協力によりトラが無事に戻ってくる過程の中で、地域猫やTNR活動について丁寧に描かれ、「さくら猫」や「逸走」、「終生飼養」といった猫の福祉愛護の理解を深めることができる作品である。

また、りつの「トラは生きているんだ。ぼくらと同じように、生きているんだ。」というけんごへの言葉は、読者に対しても、動物も私たちと同じように生きていて、感情や要求があることを認識し、人と動物が共生するよりよい社会づくりのために私たちがどのような責任を負い、果たすべきなのかを気付かせるような重要なシーンとなっている。

「サヤのおはなし」

高橋 久美子（山形県）

＜受賞理由＞

ツキノワグマの子熊サヤが熊の家族のぬくもりと自然の四季を体験しながら成長していく物語。森にすむ野生動物の生態や共生について詳細に描かれており、読者は飽きることなく作品の世界に没入できる。特に、森の恵みを食べる描写は、読者の味覚までも刺激するようである。

また、温かい話だけではなく、動物から見た自然の厳しさや人間の身勝手さ、人間から見た害獣の問題など、人と野生動物との関わりの厳しさと難しさが描かれており、自然に読者が動物と共生する大切さや相互理解の重要性に気付くきっかけになり得る作品である。